

はじめに

——実感に根差した体験理解へ——

子どもとのワークショップの体験をどのように捉え、表現し、考察や分析を行い、その体験を理解していけばよいのか。これはワークショップの実践に携わる人々にとって大きな関心であり疑問ではないだろうか。美術や身体表現などの表現活動を媒介とするワークショップは、1990年代に入り、美術館や文化ホールの取り組み、NPOによる活動等を通して全国各地で盛んに取り組みられるようになった。その頃、筆者もチルドレンズ・ミュージアムに勤務し、ワークショップや体験型の展覧会（ハンズオン）の企画を手がけ、その後も今日まで地域や大学等で様々なワークショップに取り組んできた。事業実施の報告書については日時や活動名、参加人数と活動概況の記述など、報告すべき事項が予め決められているが、ときに実践の成果や意義、子どもたちの体験について何かしらまとめなければならないときには、何をどのように書けばよいのか、その内容と方法に困るという体験がたびたびあった。

ワークショップについて文章を書くのは事業担当者や研究者だけではない。ファシリテーターや講師などの実践者はもちろん、学生や大学院生、ボランティアなど、ワークショップにかかわる様々な人々がそれぞれのかかわる立場からの目的や思いを持って書くことになる。しかし、あらためてワークショップをどのように捉えているのか、そのことをいかに考えているのかを振り返り、言葉にするとなると、体験を捉える視点や方法、それを表現するための言葉や理論が今ひとつよくわからないという事態に直面する。経験的に分かっていることはたくさんあるはずなのだが、体験についてその意味を考察し、何かしらの研究として書くことはやはり簡単ではない。

また、2000年代に入ると学校に「総合的な学習の時間」が導入され、「参加体験型のグループ学習」(中野, 2001, p. 132)とも言われるワークショップは学校現場にも普及し始めた。しかし、アーティストやファシリテーターを外部から招き入れて行なうワークショップなどは回数も限られ、通常の授業に比べると前後の学習の系統性の中にうまく位置づけられているとは言えない場合もある。通常の授業とは異なる人、テーマや内容、非日常的な場の雰囲気もあって子どもたちは普段とは異なる生き生きとした積極的な姿を見せることも多い。しかし、その一見楽しそうな様子が「楽しいだけ」にしか見えず、学習や発達として有意義な成果が得られたのかを明確に捉えることが難しいとも言われる。そうになると、活動自体は楽しいものの、ワークショップにはあまり肯定的な評価を与え難くなる。そうならないためには、明確な達成目的や指標に沿った枠組みで分析・評価していこうということになる。予め授業の一環として組み込まれた目的を達成するための活動ならば、むしろ通常の授業を発展させた形で行なった方が効果が高い場合もあるだろう。そうでなければ、目的達成からもワークショップの特性を活かした活動体験からも離れてしまう。目的と方法に大きなズレをかかえたままワークショップを行なっていったならば、精緻に分析したとしても、どこかしらワークショップで感じていたあの実感が削ぎ落とされているような気がして、やっちはみたものの、プロセスや結果はもちろん、実践や省察についてもなんとなく違和感を感じることになるだろう。近年、教育現場に要請されているアクティブ・ラーニングや協働学習、他者とのコミュニケーションを通じた課題解決型の学習などはワークショップと重なるところも多く、ワークショップの体験をどのように捉えて考察することができるのかという問いは、体験にまつわるより大きな関心事であり、研究の課題になってきているとも言える。

そんな中で、ワークショップについて書くことの難しさは、実践を捉える視点や研究方法が今まで十分に練られてこなかったという問題があることに加え、ワークショップの場と体験の特性上の難しさにも関係がある。そもそもワークショップでの体験とは参加者一人ひとりにおいて、そのあり方も感じられ方も異なるものである。そのため、視点を定めてアンケートなどでデータを収集し、ビデオカメラなども使って複数の客観的な記録をとり、科

学的な分析手法を用いて様々な視点からワークショップの成果を科学的に示そうと試みるわけである。そうした研究が重要であることは確かだが、しかし、それがワークショップの体験理解として、場にかかわった実践者として感じたことに繋がった納得や理解を生み出すかどうかと言えば、少し別の問題となってくる。

では、自分たちが実践者としてかかわるワークショップの体験を理解していくための、実践者ならではの研究方法はないのであろうか。それが単なる実践者の主観的な思い込みではなく、十分な論理性や明証性をもった研究にまで繋がるような方法を見出していく必要があるのではないだろうか。

そこで本書では、近年、保育や福祉などの臨床的な実践の現場で取り入れられているエピソード記述の方法を手がかりに、子どものワークショップの体験理解とその研究方法について実践者向けに整理し、研究事例を示しながら新たな体験理解と言葉（概念）を生み出すまでの研究プロセスを示したものである。エピソード記述は発達心理学者の鯨岡峻が長年の研究を通して練り上げた研究方法である。現場での関与観察を通して客観的な事実のみならず、他者とのかかわりや場の中で相手との間で間主観的に感じたことも重要な手がかりとして捉え、エピソードの記述を通して出来事の意味を考察していく、臨床の場に適った考え方であり研究方法である。

筆者もビデオカメラでワークショップの記録を取ることも多いが、実際にワークショップの過程で捉えたり感じたことと、映像が切り取る事象はやはり異なるものである。そうした違いにも目を向けながら、関与観察によるエピソード記述とビデオ記録に基づく分析との比較検討も行なった。それによってワークショップの場の中に内在し関与する実践者だからこそ為し得る、場の中で感受される実感と繋がったワークショップの体験理解の方法を提起した。それはワークショップという創造的な場を生きる中で私たちが共に感受し合い、共に生み出している生の実感ともいえるべき、ワークショップの体験が持っている意味と価値を浮かび上がらせ、ワークショップの持つ新たな可能性をひらく手がかりを与えてくれるものと考えている。

本書はその導入的な実践研究例を示すものである。まず、第1章では筆者の主な活動領域である美術表現の分野を対象とした子どものワークショップ

実践の研究のこれまでを振り返り、ワークショップの体験理解の新しいアプローチを模索する必要性を述べる。第2章では既往のワークショップ研究を概観し、ワークショップ研究の傾向と今後必要となる研究の視点や方法を明らかにする。それを受けて第3章では、表現活動におけるコミュニケーションの感性的な位相に着目し、感性的体験を捉えるためのアプローチを検討する。第4章では感性的な視点でワークショップの場にかかわる中で実践者が感受する相互の情動の力動感を軸に、体験の全体性を捉える視点を vitality affect の概念を軸に検討する。第5章ではワークショップの現場に関与観察とエピソード記述によるアプローチを応用することの学問的背景について検討する。第6章では様々な人々のかかわり合いが刻々と展開するワークショップの動的特性をふまえ、そうした動きの中にある実践を捉えるための考え方を提起する。それらの仮説的アプローチを基にして、第7章では絵画表現ワークショップの実践事例を、第8章では映像表現ワークショップの実践事例を考察する。第9章では4ヶ月間のこれら二つのワークショップ実施期間中の観察者（筆者）の視点の変化を検討し、第10章では絵画表現ワークショップのビデオ映像をもとに第三者との共同検証を行ない、観察者視点の重層的な分析を行なう。こうした取り組みをふまえ、第11章では子どものワークショップの体験理解につながる新たな視点の創出を試み、第12章では本研究が生みだした知見が子どものワークショップの体験理解や実践研究にどのような貢献が可能かを述べ、本研究の成果と意義をまとめる。

これから本研究が示すのは、子どものワークショップ体験を捉え理解していく上での数ある考え方や方法の一つであり、すべての実践や研究のニーズや課題に応えられるものではないことは確かである。しかし、本書を通じて各地でこうした実践に取り組んでおられる方々が自らの実践を振り返り、実践について書くことが幾分でも容易になり、日々感じてはいるものの上手く言葉にできなかったことが少しでも描きやすくなり、その意味を考えて次なる実践と子どもの体験理解に繋げてもらえたならば幸いである。

2017年1月31日

笠原広一